

子どもの「悪」を道徳的発達へとつなげるための道徳教育の提案 ーエーリッヒ・フロムの「悪」の見地を視点としてー

加藤立樹*

東京福祉大学 教育学部(伊勢崎キャンパス)

〒372-0831 群馬県伊勢崎市山王町2020-1

(2016年2月29日受付、2016年3月20日受理)

抄録: 本論文は、未成年者のいじめや少年犯罪行為などを、子どもの「悪」という根源的部分から考察し、「悪」を道徳的発達へとつなげるための教育方法を提案するものである。論文の前半では、エーリッヒ・フロムの理論を中心に援用しながら、子どもの「悪」がどのようなエネルギーをもって具現化するのかを酒鬼薔薇事件を通して検討し、「悪」の姿は、①力の使い方を誤った形、②求めるものが手に入らない心の叫びの形、の2つに分類可能であることを示した。論文の後半部では、精神科医ウィリアム・グラッサーの選択理論を参照しながら、子どもの「悪」を道徳的発達へと繋げるための具体的な道徳教育の方法について提案を行う。本論文で提案されるアプローチは、道徳教育の方法において基本型とされる伝統主義的アプローチを「悪 (Evil)」と「選択理論 (Choice Theory)」の観点から改良したものであり、それぞれの頭文字をとり「伝統主義的アプローチ【EC型】」と命名した。

(別刷請求先: 加藤立樹)

キーワード: 道徳教育、悪、エーリッヒ・フロム、激情、選択理論

緒言

近ごろ、いじめや未成年の少年犯罪などが多くのメディアを賑わせている。インターネットやSNSなどのメディア・ソースの隆盛は、子どもの「悪」という姿を顕在化させているとも見ることができる。そして、これらの問題が大きくなればなるほど、世間の目は子どもの「悪」から、その子どもを中心に据えられている「教育」へと移ることが多く、その際引合いに出される「教育」こそが、道徳教育である。ここには、子どもの「悪」に、道徳教育の力で対策しようとする構図が見られる。しかし、道徳教育において「悪」に対処しようとする傾向は十中八九、「『悪』の芽を摘む」という考えに至り、終結してしまう(曾野, 2011)。本論文では、そのような「悪」への対処法の難点を示し、それとは異なる方法で「悪」と向き合うことを可能にする道徳教育の方法を提案する。

本研究は、道徳教育によって、「悪」に対してどのようにアプローチし得るのかを分析・究明するために、心理学者で思想家でもあるエーリッヒ・フロムの理論(1965)を援用する。以下の過程を通じて、見えにくくなっている「悪」の姿を解き明かし、そこから道徳的発達へ向けての

道徳教育の方法を模索する。

まず、「酒鬼薔薇事件」を引き起こした少年の行動をたどることで、私たち一般人から見れば奇妙で考えられないような犯罪行動が、実体のない闇ではなく、形をもっていることを明らかにする。

次に、「悪」とされる行動をなぜ起こしてしまうのかという問いに対して、「ただやりたいから」という理由の背後に、行動を起こす人間がその行動から見つけ出そうとしているものがあることを導き出す。

さらに、そもそもこの世に「悪」が必要なのかという根源的な問いを掘り起こし、私たちは常に「悪」を嫌い遠ざけ、「善」を求める傾向があるという一般論は成り立たないことを示す。

これらの理論的考察を踏まえ、後半部では実践的な道徳教育の方法を提示する。道徳教育の授業方法において「基本型」と呼ばれている読み物資料を中心とした伝統主義的アプローチに、フロムの理論と精神科医ウィリアム・グラッサーの「選択理論」(2003)を組み合わせることで、「悪」を道徳的発達へと導く授業方法を提案し、その授業方法を、「およげないりすさん」という小学生低学年向けの道徳教材を例にしながら考察する。

*現住所

〒370-0102 群馬県伊勢崎市境上刈名1600

事例の研究と分析

1. 酒鬼薔薇事件にみる「悪」の行動

私たちに大きな衝撃を与えた一つの事件がある。1997年、神戸の新興住宅地で起こった猟奇的な殺人事件、通称「酒鬼薔薇事件」である。事件の概要を、「少年A」の父母(2011)の手記をもとに、以下に示す。

中学校2年生(1997年)の3学期、第一の事件が起こる。神戸市須磨区の路上で小学生の女兒2人をハンマーで執拗に殴り、負傷をさせる。第二の事件では、小学校4年生の女兒の頭部を金づちで殴り、死亡させた。同日、別の小学生3年生の女兒の腹部を刃渡り13センチの小刀で刺して2週間の怪我を負わせた。この時すでに少年Aは中学校3年生へ進級していた。第三の事件の犠牲者となったのは、彼の一番下の弟の友人だった。彼はその男児を地元の山へと連れていき、絞殺した。また殺害に終わらず、糸のこぎりで首を切ったり、首の皮を引きはがしたりした。彼はその後の聴取で、それらの過程を行った動機として、「自分の作品だから」と供述したという。さらには、「自分の血は汚れているので、純粋な子供の血を飲めば、その汚れた血が清められると思ったから」という理由で、男児の血を飲んだ。

「どのような方法で、人はどのように死ぬのか」を計画した「犯行ノート」が少年の自宅から発見されたことは、これらの犯行がその場の思い付きではないことを物語っており、次のようなことも明らかになった。小学校6年生(1994年)のころ祖母が亡くなるという彼にとっての最初の死の体験の日を境に、彼はカエルやナメクジの解剖を始めた。さらに、学校での図画工作の時間に、彼は赤色を塗った粘土の塊に、剃刀の刃をいくつも刺した作品を作った。彼はその塊を、人間の脳に見立てていたという。この時期から、彼はまわりの人間(友人や年下の兄弟、兄弟の友人)から危害を受けるとその危害の大きさに関わらず、非常に乱暴に、そして異常なほどにしつこく仕返しをするようになった。

2. エーリッヒ・フロムが到達した「悪」の見地

心理学者で思想家でもあるエーリッヒ・フロムの「悪」の識別(フロム, 1945)がここでの分析に有用である。フロムは自身の臨床的経験と理論的考察によって、攻撃性と破壊性についての理解に到達した。彼は、私たちの「倫理的基準が人間性についてのわれわれの知識に基づくもので、啓示や人間の作った法律や因襲に基づくものではない」(フロム, 1965, p1)という認識のもとに、破壊性や攻撃性は、人間に内在する「ネクロフィリア(死を愛好するもの)」からエネルギーを得ることを論じている。

「ジョン・F・ケネディ大統領の暗殺はもちろんのこと、

少年犯罪にあらわれる今日の暴力ムードは変革に対する最初の可能な段階についての説明と理解を迫っている」(前掲, p2)とあるように、彼はいち早く子どもの「悪」に着眼、ネクロフィリアが決して発達した人間のみならず内在するわけではないという可能性を見出し、私たちの生命に対する無関心さを問題視した。フロムによれば、大多数の人びとは、甘い声や脅迫に動揺されやすい子どものようなものだという。

3. 悪性の形態を引き起こす「激情」のタイプ

人間の行動の中で、一般的に「悪」とされるものには、その根源となる悪性のエネルギーが潜んでいると考えられる。それをフロムは、著書『悪について』(フロム, 1965)の中で、「激情」の形態として次のように分類した。①「遊びの『激情』」、②「反動的な『激情』」、③「欲求不満による『激情』」、④「復讐の『激情』」、⑤「代償の『激情』」、⑥「原初的な『血の渇き』」である。これらの「激情」の中に、「悪」のエネルギーを見ることができ(フロム, 1965, p19)。ただし、フロムは、自身が挙げる「激情」を、それぞれ正常か否か、病的であるか否かを判別しているが、ここでは「どの子どもにも起こりうる」ことを前提とし、判別はしないものとする。

- ①「遊びの『激情』」は、憎悪や破壊性に動機づけられるものではなく、技倆を示すことを目的とした形態である。結果的にその中に無意識的な攻撃性と破壊性が隠れている。
- ②「反動的な『激情』」の目的は破壊性ではなく防衛性から起こりうるものとされる。自分または他人の生命、自由、財産が脅かされる時、この「激情」は目を醒ます。たとえ生命を守るためといえども、道徳的に是とされることは無い。
- ③「欲求不満による『激情』」は、願望や欲求が挫折するとき、動物や子供、成人がこの「激情」をもって攻撃的になる。「ねたみ」や「嫉妬」から生まれる敵対行為もこれに属する。
- ④「復讐の『激情』」が大きく関係しているのが、「信頼感の破綻」であり、これが原因となって破壊性が引き起こされる。この破綻ととくに出会いやすいのが、子どもであるとフロムは述べている。彼らは善意と愛情を信じて人生を始める。両親の裏切りや、身近な人間の死の体験、信頼する友人や恋人の裏切りにより彼らは失望し、信頼を喪失する。その失望が、さらには人生そのものへと向けられ、世間を破壊する悪人へ変貌させる。
- ⑤「代償の『激情』」は「動物と人間とを問わず、生あるものを完全に支配したい」という衝動からなる。人間は、周囲の環境や人間によって完全に支配されてしまう

ような状況には耐えられない。もし何らかの理由で能動的行為が抑圧されてしまうと、人間はその「代償」として「破壊」へと至るのである。

- ⑥「原初的な『血の渇き』」は、野生とはまだ完全に切り離されていない人間の状態の血の渇きのことをいう。一人前の人間になることを恐れるがために彼らが生を超越する方法として見出すのが、殺しである。

これら6つの激情は、私たちが内に秘める「悪」を、ある形での表現へと導く大きなエネルギーとして肥大化していく。それらは私たちの「力」へと拡張される。

理論の研究と分析

1. 2つの傾向の拮抗～確実性と保護・依存～、近親相姦的きずな

フロムによれば、人間は生まれながらにして2つの傾向を持つという。一方は、「冒険（独立）を求めようとする傾向」であり、もう一方は、「確実性（保護や依存）を求めようとする傾向」と呼ばれる（フロム、1965, pp127-128）。私たちは生きていくうえで誰かの保護や愛を受けようとする一方で、独りで社会を生きていかなければならない。社会はこの矛盾を見て見ぬふりをし、私たちに生きることを要求している。

私たちはどこかでこの2つに折り合いをつけながら暮らしているのだが、後者の傾向（＝保護や依存を求める傾向）から抜け出せずに苦しんでいる人間も少なからず存在している。それは、「母なるもの」の保護や愛から抜け出せずに苦しんでいる人間である。それをフロムは「近親相姦的きずな」と呼んでいる。

フロムが挙げる「近親相姦的きずな」を、社会学者の加藤（2009, pp 82-83）は『『母なるもの』への衝動』であると説明する。そして「この『母なるもの』への衝動を母親が満足させてくれなかった場合には、子どもは大人になっても何らかの形でそれを満たそうと」する。この要素は、人間ならば男女ともに内在する。

2. 心が叫びたがってるんだ注）～前例を振り返って～

ここで、初めに述べた1997年の「酒鬼薔薇事件」をフロムの理論から読みなおしてみる。

まず、フロムの「激情」の理論を当てはめて考えると、少年のほとんどの言動にフロムの類型化が割り当てられる。それは、祖母の死の体験による「復讐の『激情』」、動物を虐殺したり、犯行ノートを作成してまで試行錯誤して行ったりした数々の虐殺による「遊びの『激情』」、凶画工作の作品に垣間見える「代償の『激情』」、やりすぎとも思える

他者への仕返しによる「反動的な『激情』」、そして体内に血を求めた「原初的な『血の渇き』」などである。換言すれば「血を飲む」ことや、「自分の作品」を生み出すことなどをはじめとして、この上なく奇妙で謎だらけの行動が、何らかの行動様式をもって表に現れていることがわかる。

また、事件の中で少年が起こした「激情」のエネルギーに感化された言動は、戦術の「冒険を求めようとする傾向」に起因する。つまり「悪」の行動が少年に冒険を与えたと解釈できる。そしてその一歩を踏み出すきっかけとなったのが、もう1つの「保護や依存を求める傾向」との拮抗だったのである。両親の愛か、または世間の注目か、彼は本当に欲しいものを手に入れられなかった。そして彼は、「悪」に手を染めた。

このようにして、子どもの中にはびこる「悪」は、この上なく奇妙で謎だらけの行動を含めて、どんな人間の中にも潜んでいる悪性の形態であること、そして人間に内在する傾向によってその姿が見て取れる。

3. 2つの姿と道徳的発達への展望

このように見てくると、「悪」の形は分類化が可能である。1つ目は、「力の使い方を誤った形」である。それは、単純な意味での「力」もあれば、技術を意味する「力」も含まれる。2つ目は、「求めるものが手に入らない心の叫びの形」である。これは非常に厄介で、「求めるもの」とは目に見えるものかどうかとも定かではない。

しかし、これらの「悪」の姿を子どもの中から明確に見出すことができれば、道徳教育においてどのようにアプローチを図っていくことができるのかが明るみに出る。例えば、前者の形であれば、子どもたちに正しい力の使い方を教えればよい。人やものを傷つける力ではなく、人やものを助ける力に変えればよい。正しい技術を与えればよい。後者の形であれば、求めるものを共に追い求めればよいということになる。

理論の研究と考察

1. この世に「悪」は必要か

そもそもこの世界に「悪」が必要なのであろうか。その根源的な疑問に答えるために、「善」の立場からも考察し、さらにノーマン・ブル（1977）の道徳性の発達段階論を援用しながら、フロムにつながる形でのアプローチを試みる。

2. ノーマン・ブルの道徳性の発達段階論

ブルは、ピアジェとカントによる子どもの発達段階論に表れている「他律」と「自律」という概念を借りて、独自の子どもの道徳性の発達段階を打ち出した。それは、道徳的

行為の抑制が、①肉体的快樂と肉体的苦痛からくるアノミー段階、②それを越えて、両親、教師など、大人の処罰からくる他律段階、③社会的賞賛や非難からくる社会律段階、そして④道徳的行為の抑制が内面化した段階の自律段階の4つに大きく分かれているというものである(野口, 1985, pp48-51)。④にまで達した子どもは、大人による処罰や社会的賞賛や非難に影響されることなく自分の「心の声」に従って道徳的判断を下す。

林(2009, p66)は、ブルの興味深い主張として「他律はどの段階でも残っていると考えている点」を挙げている。本来、ブルの道徳性の発達段階論による子どもの発達は、最終的に自律段階へ向けてのステップとされているので、前者の3段階は発達の中で踏み越えられる。しかし、高度な段階へ発達した人間も、ときには他律的な判断を下すことがある。例えば、車の運転をしているとき、「一時停止の標識を破ると警察に捕まるからしっかり停まろう」と考える。これは、罰を恐れるが故の他律的判断であるといえる。

このように、私たち(大人)の日常生活にも他律的判断を伴う場面があると言えよう。

3. メディアから見る「悪」の必要性

「他律」という観点からみると、実は「悪」の「当事者側」のみならず、「『善』の側に立つ人」も、常に「悪」を求め欲望していることが得意できる。それは、テレビや新聞などのメディアを通して起こっている。私たちが普段、いかに「悪」を欲望しているかという事実を、藤田(2011, p108)が如実に語っている。

私たちはメディアの情報を受け取る側として、日々、情報に欲望している。そのようにして届けられる「悪」を、私たちは同様に求めている。それを藤田は「悪の姿を確定する情報への欲望であり、自らが善の位置にいるという確認への欲望」と表現している。つまり私たちは、メディアを通して「悪」の存在を確定、「私は『善』だ」という立ち位置の確証を得るために、常に「悪」を欲望し、自身と「悪」の境界線を引いている。

河合(2013)は、子どもの時から何らかの深い「悪」の体験を知り、二度とやらない決心を固くすることが必要であることを主張した。これらを踏まえると、外から「悪」を知ることは、「悪」の「疑似体験的効果」をもたらす、それを積み上げることによって、「悪」が子どもを飲み込もうとしたとき、その浸食を抑えうるのではないだろうか。

4. 選択の自由、決定論

フロムによれば、人間においては完全な「善」も完全な「悪」も存在しない。ただ、私たちに存在するのは、「人間の

『自由』であって、「善」を選択するも、「悪」を選択するも、その人の自由によって決められる(フロム, 1965, p167)。

この原理は、チェスのゲームに例えられる。同じレベルの腕前を持つ2人がチェスのゲームをする。その場合、どちらも同じような勝つチャンス(自由)を持つ。だが、ゲームが5手進行すると、変化が表れてくる。有利な手を打っているAのほうが、Bよりも勝つ「自由」を多く有する。終盤に差し掛かれば、AとBの勝つ「自由」の多さは歴然となる。つまり、その時々で迫られる選択を「決定」することで、「自由」の幅は変わり、やがて、「自由」は結果という「真実」に変わる。フロムの主張は、「自由」とは手段ではなく「真実」を表すというものである。

こうした選択を私たちが生涯にわたって繰り返していることを考えると、その一つひとつに重要な意味を秘めているように思える。

5. 「悪」の必要性は「疑似体験的効果」が語る

ここで「悪」の必要性の問題に立ち戻ると、先述したように、私たちはメディアを通して「悪」を知ることによって自分たちの「善」を今一度確認する。まさにこの行為は、ブルの道徳性の発達理論における「他律」のステップを踏んでいると考えられる。つまり、私たちは「悪」の姿を確認するとき、無意識のうちに、「私はこうなりたくない」という「他律判断」を下していると考えられる。また同時に、その行為こそが、「もし私ならば」という「疑似体験」を行うのである。

そうしてこの「体験」の連続的な繰り返し、生涯における(フロムが提唱する)選択の「自由」の幅を広げる。つまり、私たちはこうした「疑似体験」の繰り返しによって、「善」への選択の幅を広げられるようになる。

このような「疑似体験」の必要性が重視され、そして実践され得る場が学校における道徳教育ではないだろうか。例えば、いじめや暴力などの起こりやすいケースを事前に与えることにより、これらを未然に防ぐことも期待できる。

よって、「善」という存在(要素)を得るためには、その対極となる「悪」の存在も否めないのである。

実践的方法論

1. 道徳授業で「悪」の「疑似体験」

ここまでの考察の中で、「疑似体験的効果」を導き出した。以下では、これを道徳授業に盛り込むアプローチを探ることとする。

道徳教育の授業方法には、伝統主義的アプローチと呼ばれ、読み物資料を通して主人公の経験や思いや葛藤を子ども本人の経験や思いへと振り返らせるきっかけを作る授業

方法がある。これが、「基本型」と呼ばれ、教育方法において、道徳教育の入門的な意味で重宝される方法である。

この授業方法と「悪」との関連性は、読み物資料である。読み物資料を通じて学習者の「疑似体験」をもたらし得ると考えられる。伊勢(2009, p180)が「社会を秩序あるそれとして成立せしめている価値規範について、子どもたちが幅広く理解することも要請されている。……今日的状況のもと、子どもたちはそれらを習得することができる機会であった豊かな体験がなされづらい様々な要因に取り囲まれながら暮らしている」と主張するように、体験は、現代を生きる子どもにとって習慣を得るために欠かせない要素であるといえる。豊かな体験がなされづらい今日だからこそ、いっそう疑似体験の重要性は増す。

しかし、「悪」に関する「疑似体験」を得るには、従来型の方法では十分ではない。なぜなら、教材として提示される読み物資料の大半は、その結論が大団円、つまりハッピーエンドで結ばれ、内容のおもてに「悪」の色が見えないからである。このような流れの読み物資料ばかりで何度も授業を行って行けば、子どもたちが本音と建前のもとで形式的な授業をするようになり、授業の中身がなくなるのは当然のことである。

従来型の問題点を超えて、「悪」の「疑似体験」を得るためには、「悪」の世界へと敢えて足を踏み入れる決断を下すことが必要である。

2. 選択理論を踏まえた「悪」の道徳授業

「悪」を道徳の授業へと取り入れるために、前提として、「疑似体験の効果」を通じた道徳授業を挙げたが、これだけでは、子どもの「悪」は野放しになり、道徳的発達へとつながらない。

そこで、さらなる手立てとして、精神科医のウィリアム・グラッサー(2003)の選択理論を導入する。この理論が重視するのは、「過去」に固執することなく、「未来」に希望や夢を抱きながら、「現在」の生活に焦点を当てる、教育相談的な手法である(柿谷・井上, 2011, p12)。もともとは更生施設で用いられ、近年になって学校教育において注目され始めた。

選択理論はまず、人間は5つの基本的欲求をもち、それを満たそうと行動するという前提に立つ。その欲求が、①「生存」の欲求、②「愛・所属」の欲求、③「力(承認)」の欲求、④「自由」の欲求、⑤「楽しみ」の欲求である。人間はすべて、これら5つの欲求を満たすために、「内側から動機づけられて行動する」と選択理論は考える。もちろん、これら欲求を満たすために、どのような方法で満たそうとするかは、人それぞれに違いがある。例えば、「楽しみ」の欲求を満たすための行動は、ある人にとっては「映画を見に行く」ことであら

うし、また別の人にとっては「買い物をする」ことであろう。

このイメージは、過去の体験で自分の楽しみがどう満たされたかを情報として記憶していることによるものであり、その情報を、現在の欲求を満たすための方法として引き出す。この記憶が眠る脳の部分をグラッサー(2003)は「上質世界」(願望)と呼び、いわばイメージ写真のようなものを想定している。その世界にあるものを現実の世界で手に入れようとして内側から動機づけられ、人は「思考」し、「行為」する。これを「全行動」と呼ぶ。この「全行動」が、上質世界を得ようと「選択」する。

この一連の選択理論によって行われる子どもの学習は、外側からの働きかけにのみ影響されて終わらない。選択理論による道徳教育は、従来型の伝統主義的アプローチの背後にそびえる、画一的な大団円、すなわち本音と建前の世界に、子どもを簡単には導かない。なぜなら自身の力で上質世界を描き、自身の力で全行動を行う必要があるからだ。それは、従来型の方法に、選択理論をもちこむ利点となり得よう。

本論文では、ここまで検討してきた「悪(Evil)」と「選択理論(Choice Theory)」を伝統的アプローチで扱い、その方法を「EC型」と名付けることとする。

3. 「およげないりすさん」という授業

EC型における授業展開を、小学校低学年用の道徳資料である「およげないりすさん」を例に、以下に示した。授業のねらいを内容項目2-(3)「友達と仲よくし、助け合う。」とし、授業のねらいとは別に、「悪」の魅力に触れながら、それを超えた上質世界への道徳的発達を目的としている。読み物資料は以下の内容である。

【資料 およげないりすさん】(抜粋)

池のほとりで、あひるさんとかめさんと白鳥さんが、池の中の島へ行って、遊ぶ相談をしていました。

そこへ、りすさんが遊びに来ました。

りすさんもみんなと一緒に、島へ行きたくくなりました。

そこで、

「僕も一緒に連れて行ってね。」

と、みんなに頼みました。

「。」

みんなが、言いました。

そして、みんなは池に入ると、島の方へ泳いでいってしまいました。

りすさんは、一人ぼっちになってしまったので、うちへ帰りました。

文部科学省(2014):わたしたちの道徳 小学校1・2年。文溪堂, 東京。

※ には、「りすさんは、泳げないからだめ」が入る。

この授業で本素材を扱うにあたって子どもに提示する部分は、前段の一部とした。これは、子どもの主体を第一に置くため、また、結論部の大団圓に安易に触れ、「悪」の要素が抜け落ちることを避けるためである。

「悪」から上質世界へと道徳的に発達する指導過程を、『道徳授業における問題解決学習再考』（西野, 2014）の表を参考に、その特徴を確認する（表1）。

4. 「悪」の自覚

この授業では、まず第1段階として、子どもの「悪」を浮き彫りにさせ、その自覚を促すことを目的とする。読み物資料文中の、「そして、みんなは池に入ると、……一人ぼっちになってしまったので、うちへ帰りました」の2文を参考にしながら、自然な流れとなるように子どもに自由に の中に入る台詞を考えさせる。それを個人で考え、グループないし、全体でフィードバックする。そうすることで、私たちが、誰しも心に「悪」を秘め、解放をもとめているかを、実感をもって知ることができる。その後、りすさんの側に立った心情理解を通して、自身の解放された「悪」がいかに周りに影響を及ぼすかを理解し、さらなる自覚を図れる。ほかでもない自身が編み出した「悪」が影響を及ぼすことに気付くことが肝要な点で、それが自身の「悪」への強い自覚へとつながる。

また、子ども自身が考えた「悪」を受けて、りすさんが取るであろう行動にも目を向けたい。そうすることで、「悪」がさらに別の「悪」へと連鎖するさまを実感できる。

5. 結末は自分の上質世界へと

第2段階では、「悪」の自覚を超える。そして、より良い世界の姿を描く「上質世界」（願望）を子どもたちに想起させる。その際に、選択理論が教育相談的に利用される（これをリアリティセラピーという）時の4つの質問を道徳教育的に活用する。その質問項目は、①「どうなったらいいと思いますか」（願望を聞く）、②「そのために何をしていますか」（現在の行動を聞く）、③「それは効果がありますか」（自己評価を促す）、④「より良い方法を考えてみませんか」（計画を立てる）の4つからなる。表2にて指導過程を示したので参照されたい。①にて上質世界のイメージを行い、②③にて現状と願望との比較をし、両者の齟齬を見直し、反省する。④にて願望を得るためには思考と行為をどのように変えていくと良いかを考え、行動計画を立てる。また、③～④へのステップにおいて、自己評価し、行為と思考を変える際、「自分が」変わろうとするように促さなければならないというところに選択理論のポイントがある。

なお、子どもの発達段階によって質問の多少の言い回しは変わる。上質世界についても、発達段階によって、言葉

表1. 「悪」から上質世界へと道徳的に発達する指導過程

基本過程	学習の流れ	指導の流れ
導入	問題の意識化 読み物資料の範読を聞く	問題提示
「悪」の自覚	読み物資料中の、 <input type="text"/> に当てはまる台詞を考える (複数回答可) 個人→グループ→全体	経験想起へと繋げはじめ
	自身に根付く「悪」の姿に気付く りすさんの心情理解・自身が考えた「悪」(台詞)を受けての、りすさんの気持ち	集団の問題意識高揚 問題の主体化と内面的吟味 共感・疑似体験
	この後りすさんが起こすと考えられる行動 ◇あひるさんたちへの暴力行為 ◇あひるさんたちの悪口 どうしてりすさんがこれらの行動を起こすと考えられるか	心情深化・欲求の理解 見通しや原則の把握(「悪」の連鎖) 現在と上質世界との比較 上質世界選択への4つの発問 ○どうなったらいいと思いますか
上質世界を描き、 その選択へ	4つの発問から、自身が願うあひるさん、かめさん、白鳥さん、りすさんの未来の上質世界(イメージ写真)を想起	○そのために何をしていますか ○それは効果がありますか ○より良い方法を考えてみませんか
自身の生活へ	自身にかかわる類似場面の整理・反省	「悪」の自覚の一般化・4つの質問

表2. リアリティセラピーの4つの質問と道徳教育において活用する際の指導

読み物資料を用いての指導	リアリティセラピーの4つの質問	自身の生活への一般化
みんなが仲よく手をつないでいる様子	○どうなったらいいと思いますか (願望)	自分も友達も笑顔で輪になっている様子
りすさんを一人ぼっちにした	↓ ○そのために何をしていますか (現在)	以前、自分の悪口でAくんを傷つけてしまった
今のままでは願望とかけ離れている	↓ ○それは効果がありますか (自己評価)	Aくんは泣いていた
りすさんもできる遊びをすればいいのではないかな 謝るべきだ	↓ ○より良い方法を考えてみませんか (計画)	悪口を言わないようにしましょう 温かい言葉を使おう

だけでなく、上質世界のみ絵で表現するなどの創意工夫(ワークシート等)の余地がある(詳しくは、図1)。

リアリティセラピーをさらに内面化させるために、読み物資料の結論は敢えて提示せず、自分の上質世界を結末に描くというところに特徴を置き、さらに、現実での自身の行動を振り返らせることで、個人の行動を変えようとする意欲付けを行えるように促すことを目指す。

なお、描かれる上質世界が選択理論的であること条件として、以下が守られる必要がある(柿谷・井上, 2011, p153)。

- ① 上質は温かい人間関係から生まれる。
- ② 上質は強制から生まれない。
- ③ 上質とはそのとき最善なもの。しかし、いつでも改善できる。
- ④ 上質なものは見ればわかる。
- ⑤ 上質は気分がいい。
- ⑥ 上質は破壊的ではない。
- ⑦ 上質は有益なもの。
- ⑧ 上質は自己評価から生まれる。

6. 「選択」によって、「選択」ができるようになるための道徳教育～2つの「選択」という概念～

提案した授業方法には、2つの「選択」の概念が存在する。一方の「選択」は授業の中で、もう一方の「選択」は授業全体を、さらに言えば授業の垣根を越えて、子どもが経験するであろう社会生活全体をも覆うように支える役目をもっている。

1つ目の「選択」は、表1・2、図1を見て分かるように、授業の中で選択理論として導入・活用されている。それは、読み物資料の中での登場人物の上質世界への選択もあれば、自身の行動の上質世界を構成、そこへの選択として機能することもある。

そして2つ目の「選択」は、フロムが提唱する「善」か「悪」かの「選択の自由」である。私たちが生涯にわたってより良い「選択」をするためには、「選択」の幅を広げる必要がある。その幅を広げるためには、多くの体験をすることだ。その1つの方法として、「疑似体験的効果」が有効であることを先に示した。

つまり、選択理論の授業が、児童・生徒たちの生涯にお

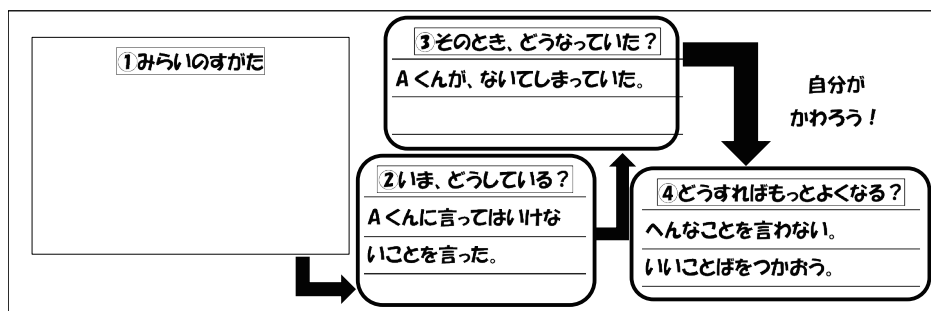


図1. 上質世界を子どもの中にイメージさせるための配置図の例

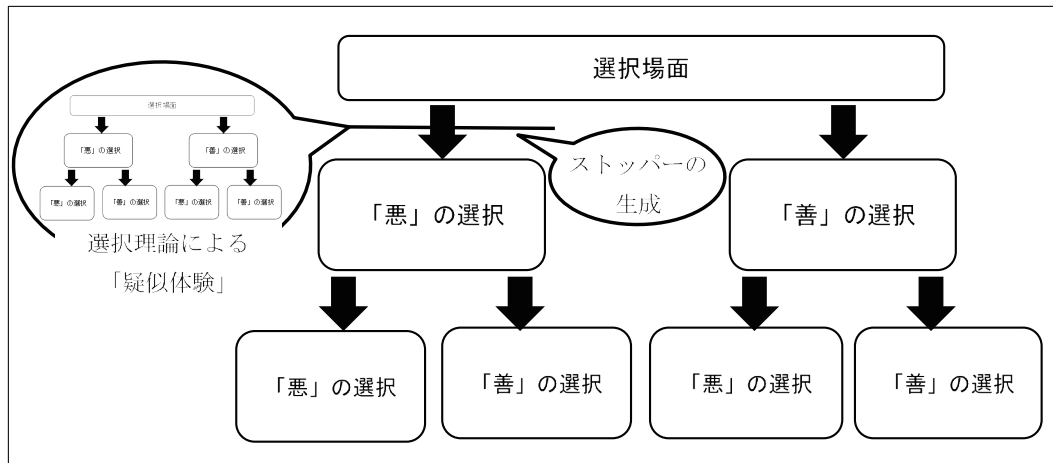


図2. 選択理論とフロムの「選択の自由」の関連モデル

ける「選択」の幅を広げ、この積み重ねにより、彼ら／彼女は生涯にわたる岐路で上質世界を描き、よりよい「選択」を行えるようになる。加えて、「選択の自由」の世界において、EC型での授業で培った力が、「悪」の「選択」をさせまいと、ストッパーになるのである(図2)。

7. 「選択」は「道を決める」ものではなく、「エネルギーをコントロールする」ためのもの

上記のモデルは、道徳的発達への道が「2つしかない」ということを意味しない。そもそもこれからの道徳教育に求められているのは、そのような(二分法の)狭い世界に留まることのないものであることは明らかである。

この理論(モデル)は、結果の1つにすぎず、本当に重視すべきは、「選択に至るまでの過程」で、「どのような上質世界を描いたか」であり、「どのような方法」で、「選択に至ったか」である。

すでにみたように、フロムは、「激情」について論じたとき、「エネルギー」という用語を用いている。私も「激情」について論じたとき、「エネルギー」という用語を用いた。つまり、本方法論において道徳的発達への大きな飛翔となる部分は、『「善」なる選択ができた』ことではない。『「善なる選択」を導き出すためのより良いプロセスを導き出した』ことである。

当然、エネルギーを倫理的基準からみて「善」とされる形へと転成させる子どももいれば、エネルギーが危険すぎるあまりそれをいなす子どももいることだろう。どちらにせよ、それらの行為は、自らのエネルギーを自覚するきっかけを与え、それがどこから湧き出るのが気付く段階に近づくところに肝要な点がある。

結論

本論文では、フロムの理論を中心に「悪」に迫った前半部を踏まえた上で、伝統的アプローチ【EC型】を提案し、子どもが「悪」と向き合うこと、そして上質世界を描くことが、子ども自身の生涯の多くの選択にどのようにして関わってくるのかを後半部で示した。

本論文で繰り返し主張してきたように、「悪」を人間の心から抹消することは必ずしも得策ではない。「悪」と向き合い、今後どうすればよいかを考えることで、道が開けることもある。自分の「悪」を上質世界においてどのように変えていけるかが、「悪」との向き合い方の1つなのであるということ、子どもたちが理解し、日常でその技術を身に付けることができれば、「悪」を建設的に「コントロールする」ことも可能かもしれない。

ひょっとすると「悪」は、常に私たちに「善く」生きる道を逆説的に示してくれているのかもしれない。

注：映画『心が叫びたがってるんだ。』の題名。ある事件をきっかけに、妖精に声を出すことを封じられた主人公が、心(感情)の声を振り絞りながら日々を生きる物語。2015年9月19日公開。

文献

フロム, E. (鈴木重吉訳) (1945): 悪について. 紀伊國屋書店, 東京.
 藤田雄飛 (2011): 悪について - 欲望とメディア -. 道徳教育の可能性 その理論と実践, ナカニシヤ出版, 京都.

- グラッサー, W. (柿谷正期訳) (2003): グラッサー博士の
 選択理論 —幸せな人間関係を築くために. アチーブメ
 ント出版, 東京.
- 林 泰成 (2009): 新訂 道徳教育論. 放送大学教育振興会,
 東京.
- 柿谷正期・井上千代 (2011): 選択理論を学校に クオリ
 ティ・スクールの実現に向けて. ほんの森出版, 東京.
- 加藤諦三 (2009): 真面目な子どもの犯罪心理学 なぜ、
 「評判のよい子」が人を殺すのか. 宝島社, 東京.
- 河合隼雄 (2013): 子どもと悪. 岩波書店, 東京.
- 「少年A」の父母 (2011): 「少年A」この子を生んで…… 父
 と母 悔恨の手記. 文藝春秋, 東京.
- 文部科学省 (2014): およげないりすさん. In: わたしたち
 の道徳 小学校一・二年 (文部科学省作成), pp78-81,
 文溪堂, 東京.
- 西野真由美 (2014): 道徳授業における問題解決学習再考.
 道徳教育方法研究 **20**, 31-40.
- 野口祐子 (1985): ノーマン・ブルの道徳性の発達段階論に
 基づく道徳教育についての考察. 道徳教育学論集 **4**,
 48-60.
- 沼田裕之・増渕幸男・伊勢孝之 (2009): 道徳教育21の問い.
 福村出版, 東京.
- ノーマン・ブル (1977): 道徳教育全書1 子供の発達段階と
 道徳教育. 明治図書出版, 東京.
- 曾野綾子 (2011): 魂を養う教育 悪から学ぶ教育. PHP研
 究所, 京都.

Toward Enriching Moral Education: From the Perspective of Erich Fromm's Discourse on "Evil"

Riki KATO

School of Education, Tokyo University of Social Welfare,
2020-1 San'o-cho, Isesaki-city, Gunma 372-0831, Japan

Abstract : The purpose of this article is to explore the nature of evil and then propose an alternative way of teaching in moral education. The article is thus arranged in two parts, theoretical and practical. In the former theoretical part, I intend to delve into the nature of evil mainly with particular reference to the versatile psychologist Erich Fromm's discourse on "Evil" and to the so-called "Sakakibara case." On the basis of the theoretical foundations, supplemented by the psychiatrist William Glasser's "Choice Theory," I attempt, in the practical part, to offer a helpful method in moral education at school, which I claim can make students faced up with "evil" in an effective way rather than take them away from it, thereby contributing to their more healthy moral development. I call this "the traditional method of moral education: the version E.C."

(Reprint request should be sent to Riki Kato)

Key words : Moral education, Evil, Erich Fromm, Violence, Choice theory